

## 「週刊現代」の記事について

先日発売された「週刊現代」の記事の中で、当院のⅠ期肺がんの生存率が低いという記載がありました。この記事を受け、内容を確認するために指摘された期間の肺がん症例を再度検証いたしました。当該期間内に当院で非小細胞肺がんのⅠ期と診断された症例は81例でしたが、その内7例は心肺機能の低下や合併症のため治療できないか治療を拒否し、無治療で自然経過をみた症例でした。残る74例の内、手術が施行された症例は69例で、4例が手術拒否または低肺機能のため定位放射線治療を施行し、1例が放射線化学療法でした。手術および根治的放射線化学療法を行った70例の内、肺がんが再発して5年以内に亡くなった症例は10例でした。他に20例が5年以内に亡くなっていましたが、いずれも脳卒中・心疾患・、他の悪性腫瘍や事故といった他の原因による死亡でした。また他疾患によって亡くなった20例中13例は診断時にすでに80歳以上の高齢者でした。この結果から当院の根治治療後のⅠ期肺がんの再発率は14.3%となります。他病死を含めた5年生存率は59.5%ですが、肺がんに関連した5年生存率は82.8%となり、標準的な治療成績であると考えます。

このたびの記事で引用されているデータは、国立がん研究センターが公開した院内がん登録生存率集計結果閲覧システムによるものと考えられますが、データ引用にあたって「当該生存率については、施設間で患者構成等に差があるため、各施設の生存率がただちに当該施設の治療成績を示すわけではないこと、さらに施設間の比較には適さないことに留意して下さい」という注意書きがあるにもかかわらず、治療不能症例や他病死も含めた数字を単純に抜き出して比較し結論づけた内容で、不適切な記事と言わざるを得ません。

当院は今後とも高齢化の進む岡山県北の地域医療を支えるために診療を続けて参りますので、引き続きご支援をよろしく願いいたします。

令和3年9月24日  
津山中央病院  
病院長